

## 美術の窓 (107)

## 新 発 見 の 北 斎

大和文華館館長 浅野秀剛

先の春に大和文華館の館長に就任してまもなく、開館以来の特別展の図録をパラパラ見ていた時のことである。開館8年目の1968年11月に開催した「浮世絵版画特別展」の図録を見ていて、葛飾北斎のところで目が止まった。図録といっても、その頃のものは30ページほどの薄いものである。初代館長の矢代幸雄先生の巻頭の辞によると、出品作品はすべて森村義行氏のコレクションであるという。一図一図は小さく白黒ではあるが、二百余図掲載されている。おそらく、出品作を全点掲載したものであろう。私が秋田の小都市で高校三年生をしていた時であり、浮世絵に何ら関心を示していなかった頃のことである。その後、浮世絵を学ぶようになり、ほとんどの図録に目を通したつもりであったが、その図録は初めて見るものであった。

目が止まったのは横判のシリーズ「風流隅田川八景」の4図である。副題は「待乳の紅葉」「みめぐりのせいらん」「梅若(?)の秋月」「両国の夕照」で、署名は4図とも「北斎画」となっている。二人あるいは一人の女性が、名所の景観とともに描かれている、いわゆる名所風俗画である。目が止まった理由は、その作品を記憶していなかったからである。図版の下に記された注記に「嫌・大四」とあるので、「紅嫌い」で「大判錦絵四丁がけ」ということが分かる。紅嫌いというのは、錦絵(完成された多色摺り木版の浮世絵)において、主として紅色の使用を避け、濃淡の墨と紫・緑などによって彩色したものを用いる。品のある典雅な趣を狙った作品である。大判四丁がけというのは、大判を縦横に四等分したサイズを指すものと思われる。今日では四つ切判というのが普通で、一枚が13×19cmくらいの小型の作品である。諸書を調べてみると、果たして珍し

い作品であった。北斎研究家の永田生慈氏が1985年に刊行した『葛飾北斎年譜』に付された「版本・版画作品目録」には、個人蔵の横小判「風流隅田川八景」として「両国の夕照」と「みめぐりのせいらん」の2図が記録されている。小判と四つ切判とは若干大きさが違う(小判が少し大きい。おそらくは四つ切判が正しい。)が、同一の作品とみて問題はない。その後刊行された本や展覧会図録等を見ても、「待乳の紅葉」と「梅若(?)の秋月」は紹介されていない。ということは、下世話な言い方をすればその2図は新発見の図ということになる。

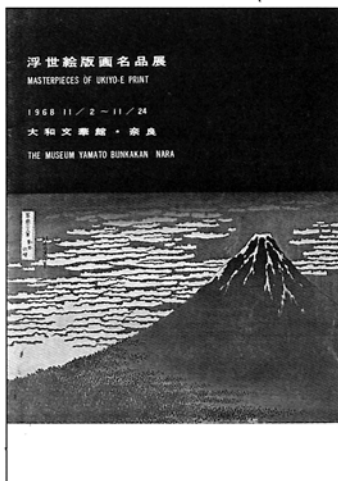
美術作品に限らないが、皆さんも、新聞やテレビで「新発見」なる報道に接することは多いと思う。しかし、何をもちて新発見とするかはなかなか難しい。例えば北斎の場合、北斎がまだ生きている時に、北斎が描いたある作品を取り上げて「新発見」というとすれば、そんな無茶なことになるであろう。その作品が重要な作品で、長い間行方が分からなかった

ものであっても、「新発見」と言うことはできない。北斎が死んで間もない時も同様であろう。「新発見」になるには、その作者のかなり精度の高い作品総目録が作られていることが肝要となる。そうでなければ、死後かなりの年月が経過し(少なくとも100年以上)、その間、継続的に作品が紹介され、個展が開催され、見出された作品の蓄積が相当のレベルに達していることが必要となる。すなわち、作品総目録に載っていない作品、又、死後一度も紹介されていず、所有者周辺以外存在を知らなかった作品が「新発見」の作品なのである。少し考えれば気付くことであるが、作品総目録が完璧であれば新発見は起こり得ない。「新発見」が成立するには、逆説的であるが、作品総目録が完璧でないことが必要なのである。しかし、作品総目録がズサンであったり、十分な研究の蓄積がない場合は、「新発見」は頻繁に起こる。人々は、またか、という思いを抱くであろう。その作品がそれほど重要でない場合もそうである。

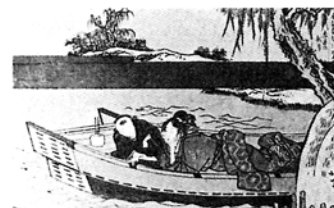
したがって、「新発見」が本当に価値を帯びるためには、その作家が美術史上の巨人であって、かつ完璧に「近い」作品総目録が出来ていて、その作品がその作家にとって極めて重要なものであるという三条件を満たすことが望ましい。

その三条件を先の北斎に当てはめてみよう。第一の条件である北斎が美術史上の巨人であることは、今日、誰も異存がないであろう。しかし、完璧に近い作品総目録ができていない点ではまだまだである。永田氏は毎年、私ですら時々、今まで紹介されたことのない作品を「発見」しているのが現状である。最後の条件である重要度という点でも、小品ということで、二重丸というふうにはいかない。ということは、件の2点は、永田氏の作品総目録に洩れた作品という程度でよいということになる。

伝存しているものに限っても、浮世絵版画は、とにかく数が多い。歌麿で二千数百点、北斎でその倍、国貞(三代豊国)に至っては二万点ほどあると言われている。したがって、作品総目録に洩れている作品も多く、先の三条件を満たす本当に重要な作品を「新発見」するのは、実は難しい。そんな中で、「新発見」が大きな価値を持ちやすいのは写楽である。写楽は、1975年のロンドン・サザビーズのオークションに出品されたベバール・コレクションの作品以来、30年余り新発見の作品がないからである。そういう観点で考えれば、前回の美術の窓で書いた、ギリシャ、コルフ島の写楽の肉筆画は大変な新発見だったのである。



待乳の紅葉



梅若の秋月



みめぐりのせいらん



両国の夕照

季刊 美のたより No.165

平成21年1月6日

発行 大和文華館